

ロンドン学部課程留学記

—クイーンメアリー大学での3年間—

BSc in Queen Mary University of London:

What University Student Life in London Gave Me

クイーンメアリー（ロンドン）大学卒 藤崎 美来

FUJISAKI Miku

(Queen Mary University of London graduate)

キーワード：学部課程留学、ロンドン、ストックホルム

はじめに

私はイギリス、ロンドンの大学へ進学した。高校までは地元の県立校に通っており、特に帰国子女であったり、インターナショナルスクールへ通ったりしたことはない。ただ海外の大学に進学したいという思いは高校生の頃からあった。それは卒業が難しいとされる海外の大学で自分がどこまで出来るのかを試してみたいという思いからだ。英語は中学校の授業中の音読で、思いがけず先生に「発音が良い」と褒められてから大好きな教科になった。高校に入ると英語を勉強するだけでなく、英語を使って専門的な勉強がしたいと思い始めた。高校一年生のときにイギリスのイーストボーンという町で1週間のホームステイをして以来イギリスに惹かれていたが、実は当初、アメリカの大学に進学しようと考えていた。というのも、当時は1ポンドが230~240円とかなりの円安で学費を考えると、とてもイギリスにはいけないと思っていたからだ。しかし、2008年に起こったリーマンショックの影響で1ポンドが150円程度になり、これはチャンスと渡英を決意した。イギリスを選んだ理由は歴史のあるロンドンという街に住みたいという思いと、大学入学時の英語力の条件がより高く日本人の少ないところで学びたいと思ったからである。

今回のレポートでは主に大学の学部課程3年間のことを記したいと思う。まず、英語が母語でない私が現地学生に負けないように頑張ったこと、大学ではどのようなことを学んだか、そして最後に海外に住むことでしかできない経験についてお話をしたい。

英語力の向上

渡英して一年目、ファウンデーションコース¹を受けていた頃は必要最低限のコミュニケーションには困らなかったものの、やはりどこか自分を100%英語で表現できないというストレスを感じていた。ある英語の先生から聞いた「言語での流暢さを失うということは自分の個性・性格の一部を失ってしまうことだ。」という言葉が身にしみた。また、英語で自分のことを伝えきれず本当の自分を理解してもらえていないのではないかと、という不安もあった。このストレスや不安がだんだんと消えていったのは、大学1年生の半ばを過ぎた頃からだ。スカイプで日本にいる家族と話す時以外は全て英語で見て、聞いて、読んで、書いて、話してという生活をするよう努めた。それを続けるうちに日本語で文章を考えてから英訳して話していたのが、最初から英語で文章が頭に浮かんでくるようになった。友達の話もまずは映画の字幕のように一回頭の中で和訳してから理解していたものが英語でそのまま理解が出来るようになった。見る、聞く、読む、書く、話す、を全て英語で行うことで思考自体を英語で行えるようになり、頭の中のデフォルト言語が英語に切り替わったような感じだった。何気ない一言、細かい意見や感情も表現できることが増えて以前のような心配はほぼなくなっていった。

また、文系の学部で論文の課題が多かったため、大学が開催する無料の講座に参加して構文や文法のチェックをしてもらうようにした。更に、課題を提出する前に英語が母語の友達に論文を読んでもらったりして、出来るだけ論文の英語がネイティブに近い自然なかたちで提出するように心がけた。最初のうちは何度も赤ペンで訂正されていたが、指摘を受けるうちに自分の苦手なところがわかってきた。私の場合は a, the などの冠詞が苦手だったので、後に来る名詞が数えられるものか、the はつくつかないかということ意識して書くようにした。苦手なところを意識的に確認するようになり、だんだんと間違いは減っていった。

クイーンメアリー大学で学ぶ

2010年9月クイーンメアリー大学 (Queen Mary University of London) のビジネスマネジメント学科に入学した。この前に別の大学でファウンデーションコースを修了しているが、今回のレポートでは割愛する。イギリスは語学留学や大学院留学の国としてはかなりメジャーだが、大学の学部課程に正規の学生として在籍している日本人は少ない。同期には200人弱の学生がいたが日本人は私1人だった。学生の国籍も様々でイギリスはもちろんのこと、イラン、ロシア、フランス、ノルウェー、インド、中国などかなり多国籍なコースだった。

クイーンメアリー大学はロンドン主要大学のうちのひとつでロンドン大学連盟²に加入している。特に法学部が有名で、メインキャンパスはマイルエンドにあり、ホワイトチェペルにもキャンパスを

¹ ファウンデーションコースとは大学進学準備コースのことで、日本の高校卒業後すぐイギリスの大学に入学することは出来ずこのコースを受けることが多い。

² <http://www.london.ac.uk/305.html>

持っている。どちらもロンドン東部に位置しイスラム系住民の多い地域にある。2 駅先にはイーストロンドンモスクという大きなモスクもあり、キャンパスの周りは一瞬ここがロンドンであることを忘れてしまうくらい、エスニックな雰囲気漂う。



写真 1, 2: 運河の流れるマイルエンドキャンパス (筆者撮影)

大学の授業は1年生のときは全て必修科目で、一学期に4つのモジュール³を学ぶ。1つのモジュールにつき週に1回の講義と少人数のセミナーがあり、1年次は会計学にマーケティング、ビジネスと社会の関係性など様々な分野のモジュールがあった。2年生からは全て選択制になり、私はマーケティングやPRに興味があったので、それに関連するモジュールを選んだ。学年が上がるごとに授業の内容は高度になり、予習や課題にかかる時間も増えていく。もちろん進級するのも学年を追うごとに難しくなる。テスト前になると図書館が24時間営業になり、多くの学生が図書館に缶詰めになってテスト勉強に励む。私もよく同級生と一緒に夜遅くまで残って勉強したり、たまに図書館で夜を明かしたりしたのは今となっては良い思い出だ。

印象的だったのは、理論的なモジュールが多かったこととコース全体が社会学の影響を強く受けていたことだ。例えば、「ソーシャルメディア」というモジュールで、学生たちはソーシャルメディアを使った効果的なマーケティングの方法やケーススタディをするものだと思っていた。しかし、実際はソーシャルメディアが社会の情報拡散構造にどのような変化をもたらすか、既存のマスメディアと情報を受け取る側の上下関係はソーシャルメディアの登場によって変化するか、などについて考える内容だった。イギリスでは大学は研究機関としてのイメージがあるせいか、授業もただ教えられるというよりも一緒に考えるという姿勢が強かった気がする。そして、なによりも大学では批判的思考を持つことの大切さを教えられた。クリティカルシンキング＝批判的思考という単語が教授たちの口癖だった。

³ 学期中に開設される授業のコースをモジュールと呼ぶ。

ストックホルム大学への留学

大学の学部課程に正規生として留学するという事は、通っている大学から更に他の国に留学するチャンスもあるということだ。私は3年生の1学期間、スウェーデンへ留学した。交換留学プログラムに応募したのはミラノのボッコーニ大学へ留学が決まっていた学友からの誘いがきっかけだった。彼女と同じ大学への留学は定員が埋まっており叶わなかったが、第二希望のストックホルム大学への留学が決まった。ストックホルム大学を第二希望としてあげた理由は、社会福祉など何かと制度が進んでいるといわれる北欧社会を自分の目で見てみたいと思ったからだ。



写真3：冬のストックホルム大学のキャンパス（筆者撮影）

留学してみて驚いたのは、同じヨーロッパとはいえ大学のシステムが大きく異なるという点だった。前記のようにイギリスの大学は1学期間決められた数のモジュールを同時進行で学習し、毎週決まった時間割がある。一方、ストックホルム大学では1学期が4週間×4つのブロックに分けられており、4週間ひとつのモジュールを集中的に勉強し最後の週にテストを受け、次のモジュールに進み1つずつ学習するという方式だ。時間割も毎週変わり、大学のウェブサイトで確認しなければならない。授業は全て英語で行われる。テストの制限時間もイギリスでは大抵2時間程度だが、スウェーデンでは4時間ほどとかなり余裕をもって設定される。限られた時間の中で学んだことをどれだけ発揮できるかを測るのに対し、プレッシャーを与えずにいつも通りの実力が出せるようにという教育の考え方の違いを感じた。初めてテストを受けた際に衝撃だったのは、テスト会場にバナナを持ち込んでテスト中に食べ出す学生がいたことだ。4時間とかなり余裕のある時間設定のせいか会場にも張り詰めた雰

困気はあまりなく、軽食や飲み物の持ち込みも許されているようだった。

フィンランドからの交換留学生は「自分の大学ではテストで取った点数に納得できなければ、何度でも受け直すことができ、自分の納得のいく点数が成績に反映される」と言っていた。イギリスではテストは赤点を取らなければ受け直すことが出来ないし、2回目のテストでも赤点を取ると単位を落としてしまう。テスト勉強もスウェーデン人学生は頑張るが、無理はしないというのがモットーらしく、成績が就職に直結するためテスト勉強をしゃかりきに頑張るイギリス人学生とはやはり違うなといった感じだ。後にスウェーデン人の友人から聞いた話だが、無理をしすぎない文化はlagom⁴という、悪すぎたり良すぎたりして目立つのは良くない、中間が一番だという彼らの価値観からくるものらしい。日本的な価値観にも似たものを感じる。ロンドンから飛行機で2時間しかかからないのにスウェーデン留学は何かとカルチャーショックの多い留学だった。

「英語が話せる」以上のことを学ぶ

英語が話せるようになるというのもひとつのゴールだが、私が海外生活で同じくらい大切だと思うことは自分の日本人らしさや他の文化を尊重する姿勢を学ぶことである。また、それらの特性を認識しながら文化的背景のちがう人たちの中での振舞いや態度を学ぶということだ。留学してみて、自分が思っていた以上に典型的な日本人の側面を持っていることに気づかされた。人との調和を重視する日本文化に育って、個人主義の強いヨーロッパの学生たちはやはり自分勝手に映りイライラすることもあった。自身と文化的背景が違う人たちと一緒にいたり、異文化の中に暮らしたりしてこそ価値観や考え方がどれだけ自らの文化的背景の影響を受けているかを実感する。イライラするのは自分の価値観で彼らの行動を計っているからで、「郷に入っては郷に従え」とここではこういうものだと割り切ることが大切である。同じコースにはヨーロッパや中東、アジア、アフリカなど多国籍な人々がいたおかげで、一緒に勉強をしていくうちに多種多様な文化や価値観にふれることができた。彼らの個性なども考えた上で、育った文化がバラバラな国際的場面でもどのような振る舞いや言動を取ればよりグループディスカッションやグループプレゼンテーションなどの課題を円滑に進めていけるかを学べたのは大きな力になったと思う。

また、日本を離れるということは他の国から見た日本を知るいい機会でもある。私はイギリスの新聞や電子版のジャーナルに書いてある日本についての社説やコラムを出来るだけ読むようにしていた。それは日本の国際社会での立ち位置を学ぶことに繋がると思ったからだ。留学というのは自分のアイデンティティや生まれ育った国を客観的に見直すチャンスでもあると思う。

⁴ ラーゴム：丁度いいとか心地良い、塩梅が良いと言った意味のスウェーデン語独特の単語。

海外に住むことでしかできない経験

私はロンドン滞在中に学業以外でもたくさんの貴重な機会に恵まれた。2012年はウィンブルドンテニスチャンピオンシップとロンドンオリンピックで通訳兼ローカルサポートスタッフとして日本からロンドンに取材に来た日本のテレビ局の方々と一緒にお仕事をさせていただいた。特にオリンピックは一生に一度あるかないかというタイミングであり、まさか受かるとは思っていなかったもので、採用の電話がかかってきたときは本当に嬉しかった。2013年には再度ウィンブルドンで通訳としてお仕事をやる機会を頂いた。日本に居ると英語を話せることが有利に働くが、逆に海外にいと日本人であることがアドバンテージになる。日本人であることが有利に働くということは、それまで英語がネイティブレベルで話せて現地の大学にも通っているのだから現地人と同じレベルで勝負できると考えていた自分にとっては少し悔しくもあった。しかし、自分と同じような学位を持っている人はごまんといるし、英語を話せるのも当然だ。だから日本語が話せる、日本の慣習を理解しているということが他との差別化をはかるポイントなのだとということを実感した。

他にも、PRに興味があったので大学2年生の時にはウィメンズウェアの小さなファッションブランドでPRのインターンをした。インターン募集の記事はロンドン在住の日本人が使うクラシファイドのウェブサイトで見つけた。デザイナーは日本人の方だが、私の上司は南アフリカ出身で常に英語を使ってやりとりした。立ち上げたばかりのブランドだったので、営業電話やセレクトショップに出向いての売り込みなど実践的なことにも挑戦した。このインターンシップで英語での電話マナーやビジネスメールの書き方を学んだ。イギリスは学生ビザに就労許可が含まれており、学期中は週に決まった時間まで、休暇中はフルタイムで仕事をする事が出来た。日本語と英語、両方を使った環境で働く経験ができたことは自分にとって今でも大きな財産である。



写真4：クイーンメアリー大学卒業式（筆者家族撮影）

おわりに

私は2013年7月に無事、クイーンメアリー大学を卒業した。ロンドンの大学に進学したことによって学内でも学外でもたくさんの有意義な経験をすることが出来た。一緒に課題に取り組み、遅くまで一緒にテスト勉強した学友たちとは今でも定期的に連絡を取り合う仲である。1年以内という時間的制約のある短期留学ではなく、学部課程の正規の学生として海外の大学に進学して本当によかったと思う。大学を卒業するまでやり遂げられたということは大きな自信にも繋がったし、ただ英語が話せるだけではなく、ある種の国際人としての素養を身につけられたということをこれからの社会人生活の中でも役立てたいと考えている。最後に、このロンドンでの大学生活がもたらしてくれた数々の出会いに感謝しながらこのレポートを閉じたいと思う。